

加速する〈無限〉…自己解体と生への反転 —ミシヨ一のメスカリン実験解説—

永渕 剛介

はじめに

体外から体内へ取り込まれることによって、人の精神に何らかの変容をもたらす物質＝〈麻薬〉の摂取と依存とは、人間にとっていかなる事態なのか。

近現代においてアルコールやハシッシュ、メスカリン、LSD、その他の幻覚剤など、麻薬¹として一括される向精神物質は、一般大衆だけでなく、文学者、音楽家、芸術家にも愛好され、その魔力の虜にしてきた。例を挙げれば、きりが無いほどである。20世紀初頭から1960年代後半までは、いわゆる麻薬寛容の時代であったということもあって、彼らの多くは社会の潤滑剤あるいは気晴らしのための嗜好品という枠を大きく超えてこれらを使用し、彼ら自身の社会生活に支障をきたし、さらには命までも危うくするという道を辿った。

このような者たちに対する社会的な一般の見方および対応のシステムは、つぎのようなものである。〈麻薬陶酔は現実社会からの逃避であり、依存や乱用は社会的な不適応者が現実からの逃避行動を過度に行った結果によるものである。このようなことは、本来あってはならないこと・克服すべきことである。しかも、麻薬依存症は病気であり、依存症者は患者であるから、速やかに治療に勤まなければならない。そのために患者たちは病院および更正施設に入り、失ってきた社会的関係を復活させ、社会的自覚を目覚めさせるための再教育を受けなければならない。その中で患者たちは、過去を自ら厳しく断罪否定し、麻薬の誘惑を断ち切り、やがて社会へ復帰していくこと

¹ 本稿では〈麻薬〉と言う用語は脳内に作用して精神的な変化をもたらす物質（向精神薬）の総称として使用する。合法的な酒や煙草、カフェインなどの嗜好品も含まれる。

が期待される。>

いったん依存症になり緊急入院するほどになった患者が、生き延びて社会復帰するために用意された選択肢は、こうした社会的要請を受け入れる以外にない。しかしこの選択は、患者がなぜ麻薬を必要としたのか、なぜやめられなかったのかという、患者の精神内部の問題に深く立ち入って考慮されたものではない。患者となった者たちが批判し抵抗し逃避した当の相手でもある社会は、非のすべてを患者に背負わせて、アルコール依存および麻薬常用者に対して無条件の「転向」を強いることになっている。

一口に依存症と言っても、次のような区別がある。アルコールや麻薬は長期にわたり摂取すると薬物耐性が体内にできて、その摂取量が減少すると離脱症状により薬物に対する渴望現象が生ずるのであるが、この渴望現象が薬物依存を形成する一因であることが知られている。これを身体的依存という。しかし薬物耐性が原因ではない依存も形成され、これを精神的依存という。初めて酒というものを口にしたときからすでに娯楽や息抜きのためではなく陶酔だけを目的として飲酒を続けるものや、薬物耐性が生じない幻覚系のハシッシュやメスカリン、LSDを手放せないものなどが精神的依存の顕著な例である。

このように身体的にも精神的にも依存的になってしまった麻薬常用者が、社会の期待に応えて麻薬から離れるのは至難の業である。「不治の病」とさえいわれるアルコール依存に関して言えば、回復退院したあとになお断酒を続けて一生を終えられる人は、ごく希である。彼らの多くは再飲酒することになって瞬く間に死に至る。寛解して療後も健全に命を全うした患者を、実際に見たことがないアルコール症専門医もいるくらいである。現在の治療システムが、アルコール・麻薬へとひきよせられる実存の必然性を問うことをせず、彼らが最初に批判し拒否してきた社会へ無条件で復帰することが要請されるのであるから、回復率の低さは、当然の結果といえる。

しかしながら、ごく希ではあるが、麻薬からの生還を遂げるケースがある。そこにはある〈乗り越え〉があって、この難行を可能にしているのである。それは麻薬依存者自身の努力によると言うより、むしろ偶然性によっている。

言うならば、たまたま〈命拾い〉したということである。その〈乗り越え〉とは、麻薬依存者の〈底つき〉と呼ばれる体験の後に訪れる。〈底つき〉とは、自分に対して希望をまったく見いだすことのできない状態、自分に対して何一つ期待を持つことができない状態に追い込まれたときに得ることのできる、一種の〈諦観・悟達・啓示〉である。この、人間としてこの世に存在できるか否かのぎりぎりの地点を経験するとき、人間はそこで何を見るのだろうか。この〈底つき〉を体験した人が次のように語っている。「いつもの通りの景色がいつも通りそこにあるのだけど、神々しく輝いて見えて、涙が出て来た、その瞬間もう薬はいらないと思った」。また、「神様から〈膝かっくん〉²をされて、ああ、もう酒はいいや、と何となく思って、それ以来酒がいなくなった」。³ とことん自己破滅に向かって突っ走ってきたあげくに、どん底まで到達する。そこには、自分から一切の希望が消えたときに訪れる真っ白な空間、完全なる自己放棄の瞬間がある。〈底つき〉とはそのような体験のことである。麻薬常用者はこの地点から反転して来ない限り、麻薬依存から抜け出すことは非常に困難である。

上述したように麻薬の摂取は、人間に深刻な事態を引き起こさせるのであるが、もういちど改めて問い直す。「人はなぜ麻薬をやるのか。」

現実社会から受ける苦痛や傷を癒すため、または現実による抑圧を解き払うために麻薬は精神的な麻酔剤、鎮痛剤として有効に働くであろう。それは、ストレスを解除する〈息抜き〉という以上に、傷つき、ねじ曲げられ、痛みを耐えている自分を癒やしてくれるだろう。また、現実世界の自己を解体し、〈いま・ここ〉でない〈どこか〉へ脱出したい、抑圧された自分を解き放ち、本当の自分＝〈わたし〉のあるべき姿に戻りたいという願いを叶えてくれるかもしれない。だが、陶酔の中で箍の外れた状態の自分を本当の自分だといってよいのであろうか。麻薬陶酔者は現実の世界から船出し、自己を無化さ

² 子供の遊びの一種であり、「膝カクン」ともいう。人の背後に忍び寄り自分の両膝を相手の両膝裏に当ててしゃがむように折り曲げる。両膝裏を押された人は膝が急に曲がってガクツとなる、という遊び。

³ 『岩倉病院断酒道場機関誌おたぎ』第 36 号 (岩倉病院断酒会 1998 年) 11～69 頁。

せる中で無意識のうちに、あるいは意識的に「〈わたし〉とはいったい何なのか？」を自問自答し続けて、行き先の定まらぬ〈旅〉をしているのである。陶酔と意識の変容の嵐の中で〈わたし〉を見つけようと彷徨っているのが麻薬陶酔者の姿である。

〈わたし〉を捉える試みは本来、哲学や文学が長いあいだ取り組んできた問題であった。本稿で取り上げる詩人・画家であるアンリ・ミショーはこの問題を、メスカリンを服用するというやり方で、自らが実験台上がり、内面を凝視し考察していくという前代未聞の角度から行っている。観察している主体としての自分と、観察されている対象としての自分という、この二つの自分が別ものとしてではなく、意識（思考）という働きの中にひとつのもの＝〈わたし〉として現れている。ミショーが試みているのはこの〈わたし〉への問いに他ならない。このことは彼自身の内に秘めた〈狂気〉にも深く関わる問いでもあった。ミショーのメスカリン実験は、1956年からほぼ10年をかけて5部作に結実する。『みじめな奇蹟』⁴（1956年）、『荒れ騒ぐ無限』⁵（1957年）、『砕け散るものの中の平和』⁶（1959年）、『深淵による認識』⁷（1961年）、『精神の大いなる試練』⁸（1967年）の5冊である。その最後の著作の最終章「四つの世界」では、宗教的とも言える超越的な無限体験が、完全な自己放棄によって訪れる境地が語られている。麻薬の果てにたどり着いた「四つの世界」は、ミショーが到達した〈底つき〉の世界なのだろうか。ミショーはこの最終章を書き終えた後、10年以上もの深い付き合いであったメスカリンと縁を切ってしまう。

本稿は、人間の麻薬への傾倒を自己の探求への切なる願いという観点で捉え、麻薬依存からの〈真の〉回復の可能性を探るべく、麻薬常用者の依存過程と相似形をなすミショーのメスカリンによる〈わたし〉への問いの過程と、その行き着く先である「四つの世界」までを辿り、ミショーにおける麻薬の

⁴ Michaux, Henri: *Misérable miracle*, Monaco-Ville, Rocher, 1956.

⁵ Michaux, Henri: *L'infini turbulent*, Paris, Mercure de France, 1957.

⁶ Michaux, Henri: *Paix dans les brisements*, Paris, Flinker, 1959.

⁷ Michaux, Henri: *Connaissance par les gouffres*, Paris, Gallimard, 1961.

⁸ Michaux, Henri: *Les grandes épreuves de l'esprit, et les innombrables petites*, Paris, Gallimard, 1966.

摂取と依存という事態を検証する。

1. ミシヨーについて

アンリ・ミシヨー (Henri Michaux) は 1899 年、ベルギーの地方都市の中流家庭に生まれた。彼の幼年時代が、不幸だったことは間違いない。ミシヨーは後年 (第二次大戦後)、編集者ルネ・ベルトレ René Bertelé (1908-1973) との会話で、こう述べている。

何の価値もない少年時代だった。過去に戻れば戻るほど、自分が両親の許では一人の異邦人だったという印象が強く感じられてくるばかりだ。… (中略) 口がきけるようになるとすぐ、わたしは捨て子だったと言った。… (中略) 六ヵ月も経つと、わたしはもう拒絶の生を送り始めていた。物を食べようとせず、後には話さえしようとはしなかった。わたしは一切に反対しそれを受け入れまいとしていた。人生の前で、歯を食い縛っていた。⁹

物心ついたころから彼は、対他世界と馴染むことができない存在だったのである。その事は、たとえば、初期の代表作とされる“La nuit remue” (1935) 「夜動く」の中にも色濃く現れている。

ここで簡単にミシヨーの経歴を紹介しておこう。1906年 (7歳) から数年間ベルギー北部の田舎で寄宿舎生活を送る。彼はここで、屈辱と嫌悪に充ちた数年間を過ごす。その後、イエズス会の私学やブリュッセル自由大学などで学ぶ。医者になろうと考えたこともあったが、やがて世を捨てて宗教家の道へ進もうとして父親の猛烈な反対に遇って果たせず、苦悩の一時期を過ごした。

21歳の時、突然ブローニュを出発する給炭船に一水夫として乗り組み、イギリス、アメリカ、ブラジルと廻る数ヶ月の航海を始めた。彼はこの出奔に

⁹ 小海永二「アンリ・ミシヨー論」、A・ジイド、『アンリ・ミシヨーを発見しよう』 (小海永二 訳、サンリオ出版 1970年)、67～86頁所収、80頁。

よって、生活的にも経済的にも、親と訣別した。しかしこのことは同時に、堅実で現実的な人生設計をも捨てることになった。彼がこのような冒険をあえてしたのは、それほどに〈いま・ここ〉が耐えがたかったからであり、〈いま・ここ〉でないどこかへ、〈いま・ここ〉に直接つながらないどこかへ、脱出せざるをえなかったからである。その〈どこか〉は、この現実の世界を超えた、ミショーの内部で幻想的にとらえられた〈どこか〉なのである。そもそもミショーにとって〈旅〉とは、このようなものであった。

この21歳の時の〈脱出〉以来、彼はくりかえし旅行を重ね、そのたびに多くの作品を生み出している。自分をとりまく、現実世界のしがらみを断ち切り、あらためて自分の中に入っていくためには、定期的にそうした脱出と創作行為が必要だったと思われる。ミショーは、自らの対人的な、および対社会的な異質性を幼いときから感じ続けてきた。その自覚が、彼を詩人にしたのである。詩人になり、自分の異質性を一個の虚構の幻想として描くことで、初めて世間と渡り合うことができたのである。彼は自分の幻想を、「une boule hermétique et suffisante 密封され、充足した球体」¹⁰と呼んだり「Mes propriétés わが領土」¹¹と呼んだりしたのだったが、50歳を過ぎた頃になると、徐々に詩的世界から絵画的世界へと表現分野を移行するようになってきた。そしてミショーが54歳の時に、メスカリンに出会うことになったのである。このメスカリンとの出会いは、ミショーが今まで必死に守ってきた自分の中の狂気に、正面から向き合うきっかけを作り出した。「体に悪いから」という理由で、酒もタバコも嗜まないミショーが、メスカリンを初めとする幻覚剤にのめり込む理由はここにある。そしてこれら幻覚剤のもたらす陶酔に必死に抵抗し、そこからの回復を目指す理曲もここにある。ハクスレーは、「麻薬は天才が持つ感覚や感受性を手軽に一挙に、凡人に与える」として、その価値を称揚した。しかし一個の天才であり、その事に長い間苦しんできたミショーにとっては、「天才から凡人に至る通路」を発見することこそ、大

¹⁰ <Le Portrait de A>, 'Difficultés' (1930), "Lointain intérieur", Plume *Œuvres complètes Tome I*, p.608.

¹¹ <Mes propriétés>, 'Mes propriétés' (1930), "La nuit remue", Ibid, p.465.

事なことであった。このようにして、ハクスレーにおいてはさほど重要ではなかった幻覚の様態やその後の始末の事細かなありようこそ、ミシヨーにとってはもっとも大事なこととなったのである。そしてこのことをとことんやりきった後では、彼はメスカリンと訣別し、自分の狂気とも和解をとげる。内部の〈狂気〉を擁護するために続けてきた創作活動は、〈狂気〉と共生するように姿を変えていき、新しく開拓された境地の作品を生み出していくこととなる。

2. 麻薬陶酔の〈初心〉としての、“L'éther”「エーテル」

ミシヨーはメスカリン実験を始める約二十年前にも、麻薬をテーマにした散文詩“L'éther”「エーテル」を発表している。この、容易に手に入る麻薬であり、アルコールの安価な代替品としても飲用されていたエーテル¹²を主題にしたミシヨーの作品は詩集『夜動く』に収められ、1935年に刊行された。¹³ この作品が重要なのは、麻薬を服用するに際しての彼の「初心」がそこにかがえるからであり、後のメスカリン服用実験の際の彼の姿勢と対比することによって、その意味がより明確になるからである。

最初に指摘しておかなくてはならないことは、彼はメスカリンにおいては明確な〈実験意識〉を持っていたが、この作品においては、〈実験〉という意

¹² エーテル（ジエチルエーテル）は昔からよく知られた薬品であったが、19世紀から20世紀初頭にかけて麻酔薬としての使い方が見出されて、外科手術には欠かせないものとなった。しかしそれとは別に、安全な麻薬のひとつとして人々の間にひろまり愛好されるようにもなった。アメリカで刊行された『依存性薬物百科』には、次のような記述がある。

「エーテルはクロロホルムのように気体を吸い込んで失神遊びに使われることもあったが、アルコールの代替物としての飲用も行われていた。飲用の効果はアルコールと良く似ているが、より手っ取り早く効いた。興奮、酩酊感、多幸福感、そして幻覚を経験し、そのうち千鳥足になり意識を失うこともある。エーテル飲用の習慣は、アイルランドにおいて禁酒運動に対抗してアルコールの代わりに飲んでいたので起因する。それがロシアやフランスなどでも流行し、アメリカ合衆国では、飲酒よりも害が少ないと考えられ、医師の会合から結婚式や主婦たちの裁縫会（キルティング・ビーの会）に至るまで幅広く飲まれていた。」

Miller, Richard Lawrence: “Ether”. In: *The Encyclopedia of Addictive Drugs*, Westport, Connecticut: Greenwood Press, 2002, pp. 153-154

¹³ Michaux, Henri: *La nuit remue*, Paris: Gallimard, 1935.

識、そしてエーテルとは何かを定義しようとする意識はない。むしろエーテルは経験的に既知のものとして描かれている。彼は、冒頭でエーテルを飲む理由を次のように述べる。

人間にはある知られざる欲求がある。彼には弱点が必要なのである。それ故、過度の力による病気ともいふべき純潔¹⁴は、彼にとって特に耐え難いものなのである。どのみち、彼はうち負かさねなければならない。誰もがおのれの中に、眠らずにいるひとりのキリストを持っている。…(中略) もっと自分の「私」を失いたい、ぜひとも裸になって、空無の中で(あるいはあらゆるものの中で)震えていたい、という気持の起こることがある。実際人間は多くの船に乗りはするけれども、彼が行きたいと思うのはそこなのだ。

もしも彼が純潔にあくまでも固執するならば、どうして自分の力を厄介払いし、落ち着きを手に入れることができるだろうか？

やりきれなくなった彼は、エーテルに救いを求める。望まれた出発と無化とのシンボルであり、またそれらへの近道でもあるエーテル。

だが、ペテン師のエーテルは、他のすべての薬物と同様に、様々の風景を提示する。¹⁵

ここでミショーは、人は〈力〉を求め、あるいはそれをつかみ取ったと思いい込んでいるが、本当に人が求めているもの、必要としているものは〈弱さ〉である、と言っている。だから、見かけの力をひっくり返すために、人はエーテルを必要とするのである。

¹⁴ 原文は *contenance* である。「純潔」というよりは「(性的な) 節制、禁欲」のこと

¹⁵ <エーテル>、「夜動く」、アンリ・ミショー『アンリ・ミショー全集 1 巻』(小海永二 訳、青土社 1986~1987 年)、201-202 頁。

Michaux, Henri: "La nuit remue". In: *Œuvres complètes, tome I, édition établie par Raymond Bellour, avec Ysé Tran, Paris: Gallimard 1998. p. 449.*

だがミショーは、たんにエーテルは人々のストレスを解除する息抜きとして存在する、と言っているのではない。エーテルは、息抜き以上の決定的役割を果たすのである。ミショーは、エーテルは人を「ひっくり返す *culbuter*」、ある革命的な役割を果たすと言っている。そして近代社会の精神的基調になっている、いろんなことを我慢して、勤勉に何かをやり遂げるのが人のあるべき姿である、といった倫理観を、人間にとって非本来的な病的なものであり、自己の解体と無化へ向かおうとすることこそが、人が本来持っている欲望であるとする。エーテルは、その解体と無化への有効な一手段として位置づけられている。

しかしそのような〈力〉の解体と〈弱さ〉の実現が果たされた後に、やって来るのは何か。

それは滝のような快感の来る一瞬だ。それはでんぐり返し (*la culbute*) である。どんなにしばしばこの実験をやり直してみても、それは常にでんぐり返しであるだろう。機関銃のような、木霊こだまのようなその観念は、常に予想を越えている。☆ それへの用意ができていないことは決してない。この精神の震顛しんせんは、いつまでも完全に《冒険》のままである。

… (中略) エーテルによる快樂の中で人々が受けるその印象は、最も鋭く、最も確かなものであり、(それはすべてのものに対する嫌悪の情を催させる、と言って悪ければ) 最も人を不安に陥れるものである。¹⁶

☆ (原註) 正常な状態にあるすべての精神活動の中で、ただ一つの精神活動だけがこの現象を想起させる。それは、おのれの小心さに身をゆだねる小心な人々の精神活動だ。木霊する思考、自己批判の自己批判、自分自身を追いつめて、絶えず後退してゆく精神。

でんぐり返しによって人が導かれる状態が、「滝のような快感」である。その「快感」とは、予想を超えた、「機関銃のような、木霊こだまのような観念」を

¹⁶ 同書、214～215頁。Ibid. p.455.

抱き、「おのれの小心さに身をゆだねる小心な人々の精神活動」にある状態である。この表現を言い換えれば、無垢で純粋な、それゆえに自己防御のすべを知らず、たえず外界に敏感に反応してすぐにうち震える（＝木霊）ような精神のことである。

しかしこのような精神がどうして、快感になり得るのだろうか。それは、「でんぐり返し」が、人をストレスの中に落とし込み、窒息させようとするような〈力〉が支配する状態からの脱出だからである。それゆえエーテルは人に快感を与えながら同時に、精神のもっとも柔らかい部分を外界にさらすことによって、最大の不安も与えるのである。すなわち、エーテルを飲むことは、自分の弱点をさらすことによって、人を死の淵に立たせることにもなる。人はそのことに決して慣れることはないだろう、とミショーは言う。

ここにあるのは、普通の生活者が持っている麻薬像とは大きく異なったイメージである。麻薬は、人をリアルな現実がもたらす恐怖や不安から解放し、母胎に抱かれたような多幸福感や安息感のなかで一時的にまどろませてくれるものであると一般には見なされている。それゆえ人は、一度これを体験すると、そこから離れがたくなると思われているのである。このような一般的な麻薬像とは異なってミショーが「エーテル」で描く麻薬体験とは、〈弱さ〉という、人の持つ本質的なものを実現することである。だからそれが、恐怖の極みを体験させるものであっても、そのたびに死の縁に立つことであっても、本質的な欲求に従ってエーテルに向かわざるを得ないとするのである。一見、ミショーの見方は特異に見えるかも知れないが、依存症者の心理を正確に映し出しているものである。依存症者が求めるものも、単なる現実逃避や一時的な快楽ではなく、自己内部の力の解体であり、〈弱さ〉の極北へと意図的に突き進むことなのである。現実においては、それが自己破壊に至ろうとも。そこが、麻薬を単なる息抜きや気晴らしのために楽しむ麻薬愛好者と麻薬なしでは生きることができないと思っている麻薬依存症者を別つ地点である。

この違いをミショーは旅行記『エクアドル』（1929）の中で、阿片とエーテルを比較して次のように言う。

阿片。わたしは今ではお前を知っている…（中略）そしてお前はわたしの味方ではない。

強度の増加ということのないその完全さは、わたしにとっては何の価値もない。むしろエーテルの方がずっとキリスト教的だ、それは人間を自我から引き離す。¹⁷

ここでの阿片についてのイメージは一般的な麻薬像と合致する。しかしミショーは幸福感と安息感とに沈潜し完全なものとして終息してしまう世界に価値を認めない。むしろエーテルのように不安と恐怖を抱えつつも赤裸な自分＝〈弱さ〉をさらけ出すことこそが重要なのである。酒も煙草も嗜まなかったミショーがエーテルに込めて描く麻薬陶酔の様子は、娯楽や息抜き以上のものであって、さらには単なる快楽や慰撫を求める通り一遍の陶酔遊びの域を脱しているのは驚くべき事である。この麻薬に対する過激で動的な傾向がミショーの麻薬陶酔の初心となっている。

ただしこの「エーテル」はミショーの散文詩作品であり、作家としての創作の中に観念化された麻薬像も見取れる。それは、作家的な創意をストイックに排除し、観念化に陥らずに〈わたし〉を明らかにしようとしたメスカリン実験とは大きく異なっている部分である。

3. メスカリンについて

第二次大戦後、薬学の飛躍的發展にもなって麻薬の新種であるサイケデリックと呼ばれる幻覚剤が登場してきて、それらがおもに多様な幻覚をもたらすところから、その体験に熱中する人たちが現われた。そのなかでも特に画期的であったのが、*The doors of perception* 『知覚の扉』¹⁸ を著わしたオルダス・ハクスレーのメスカリン実験である。彼はこの著作で、メスカリンの可能性を高らかに称揚し、このメスカリンによる人工的な〈陶酔〉を、

¹⁷ 「エクアドル」(1929)、小海 訳、前掲書、第2巻、70頁。Ecuador, *ibid.* p.193.

¹⁸ Huxley, Aldous: *The doors of perception*, New York: Harper, 1954.

神秘的な祝祭性の方へ開いていこうとした。ミショーのメスカリン実験はベストセラーになったこの『知覚の扉』に触発された出版企画から始められたのであった。

メスカリンは、メキシコの先住民が祝祭において使用していたペヨーテ・サボテンからその幻覚剤的物質を分離して得られたものであり、19世紀末にはすでに知られていた。メスカリンが注目されたのは、他の麻薬と違って、幻覚による騒乱状態に陥っても明晰な意識や集中力を維持できる点である。

ハクスレー以前にすでに幾人もの文学者、芸術家が、摂取実験を行っている。¹⁹ ハクスレーが画期的であったのは、麻薬によって生まれるヴィジョンを普通の人は単なるイリュージョン（幻影）とみなすが、彼はそれこそが「偏在精神 Mind at Large」である、とした点にある。彼によると、私たちの知覚には日常の実用上から、「減量バルブ the reducing valve」というフィルターが備わっていて、それが「隠された現実＝真の姿」との接触を妨げている。麻薬はそのフィルターを解除するので、その力によって真実に触れあうことが出来るようになる、というのである。つまり幻覚剤は、真の世界へと人を導く「知覚の扉 the doors of perception」である、というわけである。彼にとって幻覚剤使用の目的は、そこから得られる快楽ではなく、それを手段とした意識の変容であり、新しい意識の獲得にあった。ハクスレーのこの論理の転換が、カウンター・カルチャーの文化運動と麻薬摂取とを堅く結びつけたのである。麻薬は、カウンター・カルチャーへの通過儀礼であると同時に、その主要な手段ともなったのである。このサイケデリック・ムーブメントは当時の現代文明の最先端であったアメリカにおいて、その現代文明を批判する最も過激な運動として生まれ、1950年代から60年代末まで、若者を中心に世界を席卷することになる。この運動の開始される時期にミショーの実験は開始され、この運動が頂点に上り詰める過程と重なるように彼の実験は続

¹⁹ 代表的な著作としては、ハヴロック・エリスの『メスカリン：新人工楽園』（1898年）Ellis, Havelock: *Mescal: a new artificial paradise*, Washington: U.S. Gov't. Print. Off., 1898. などが挙げられる。

けられることになる。²⁰

メスカリンという幻覚剤についてももう少し補足しておく。1953年当時メスカリンは、多くの精神科医によって精神障害の治療に有効な成分として研究されていた。ハクスレーにメスカリン実験を薦めることになるハンフリー・F・オズモンド Humphry Fortescue Osmond, (1917-2004)は、1952年発表の、当時注目された論文で、メスカリンとアドレナリンの分子構造の類似性を指摘し、精神分裂病²¹は麻薬による酩酊状態の一つとして理解できるのではないかと主張した。当時精神分裂病は、精神医学の中でもっとも謎の多い、正面から取り組まなければならない課題となっていたので、ハクスレーにおいても、ミショーにおいても精神科医が関与し、1960年以降サイケデリック・ムーブメントを牽引したティモシー・リアリー Timothy Francis Leary (1920-1996)は彼自身が精神科医であった。²²メスカリン実験は、〈狂気〉の研究に直結していたのである。ミショーの体験記を読めばすぐに分かる通り、ミショーの関心は、ハクスレーのような意識の変容をもたらす手段としてのメスカリンではなく、狂気を現出させるものとしてのメスカリンにあった。この二人の違いは、さらにもっと根本的な問題、すなわち「薬物は人間を変えることができるか」という問題、言い換えると「人間の精神は、脳内の化学変化に還元できるか」という問題も抱えていた。ハクスレーはこの点においては楽観的であり、問題にもしていないが、ミショーは人間の主体性

²⁰ 頂点は、1967年にヒッピーなどの若者を中心として約10万人がサンフランシスコのヘイト・アシュベリー周辺に集まったといわれるサマー・オブ・ラブ、あるいはウッドストック・フェスティバルが開催された1969年とされる。

²¹ 精神分裂病(症)(Schizophrenie)、Schizo(分裂した)、Phrenie(精神病)という呼称はオイゲン・ブローラー Eugen Bleuler (1857-1939.)によって使用され、彼はその病態を *Zersplitterung und Aufspaltung* 「粉みじんにする、分解・分裂すること」と規定している。『統合失調症あるいは精神分裂病』計見一雄、講談社 2004年、50頁を参照。精神分裂病は、2002年に日本精神神経学会で「統合失調症」と呼称変更することが決定された。本稿では呼称変更前に刊行された文献をおもに参考にしながら考察を進める関係から、この病気の呼称として主に「分裂病」を使い、適宜、「統合失調症」を併用することとする。

²² 以上の叙述は、渡辺拓哉「再魔術化の文化研究」(名古屋大学博士論文 2012年)を参考にした。

を薬物の攻撃からいかにして擁護するのかという観点から一貫して注意深く観察と考察を重ねている。

4. 〈わたし=自己〉の解体

ミショーは初めてのメスカリン実験がもたらす経験を〈奇蹟〉と見なしているわけであるが、それはどのような奇蹟であったのか。『みじめな奇蹟』の冒頭に書かれたいくつかのヴィジョンを見ておこう。

耐えがたい不快の中、苦悩の中、内部の祝祭の中。――世界は、若干の距離をへだてて、刻々と退いてゆきつつある。その距離はどんどん遠くなってゆく。

突然、一本のナイフが、突然千のナイフが、稲妻をはめ込み光線を閃かせた千の大鎌、いくつかの森を一気に全部刈りとれるほどに巨大な大鎌が、恐ろしい勢いで、驚くべきスピードで、空間を上から下まで切断しに飛び込んでくる。

わたしがまだその巨大な山々を見つめている間に、すでにそこには、わたしを激しく圧する力が坐りこんでいて、わたしが心の中で発していた《immense》ということばの、《m》という文字の上に、わたしをしばりつけるのだ。²³

一般的にメスカリンは 0.3 グラム前後が効果的な服用量であるとされるが、ここには、わずか 0.1 グラムのメスカリンの服用によって、意識も感覚も保たれたまま、一気に、〈わたし=自己〉が解体されていくようすが示されている。つまり主体としての〈わたし〉が対象としての〈わたし=自己〉を観察しているのである。この、〈わたし=自己〉が解体させられるという描写は、『知覚の扉』には存在しない。ハクスレーが提出する意識の変容の描写は、感覚が異様に研ぎ澄まされる、日常生活ではありえなかったような感覚

²³ 「みじめな奇蹟」、小海 訳、前掲書、4巻、18～20頁。
“Misérable Miracle”. In: *Œuvres complètes Tome II*, pp.622-624.

がうまれる、ということにとどまる。彼は次のように述べる。

わたしの「内部世界」において、現実が起こった変化はけっして革命的なものではなかった。メスカリンを飲んでから半時間ののち、わたしは金色に輝く光がゆっくりときらめくのに気づいた。

…（中略）要するに、メスカリンが私にもたらしたものは「内的ヴィジョンの世界」ではなく、外部の世界、私が目を開いて見ることの出来る世界におけるヴィジョンであった。

…（中略）〔引用者：乱雑に挿してある花瓶の花を、メスカリンを飲んだ後に見ると〕今眼にしているのは下手くそな生け花ではなかった。わたしが見ているのはアダムが創造された日の朝、彼が眼にしたもの——それは奇蹟、刻一刻と顕れる、裸の実存という奇蹟だったのである。²⁴

この時ハクスレーが服用したメスカリンは、ミショーの4倍、0.4グラムである。ハクスレーが提供した情報がこのような、対他世界の見え方に関わるものであったので、最初の実験を行うときミショーは、自分を襲うことになる〈わたし=自己〉の解体を予期していなかった。

わたしは、初めはそれを賛美しようと心の準備をしていたのだった。わたしは相手を信用してやって来たのだった。その日、わたしの全細胞は滅茶苦茶にかきまわされ、揺すぶられ、踏みつけられ、痙攣状態のなかに投げ込まれた。

私自身にしても、決して中立的・客観的でありえなかった。そのことをわたしは否定しようとは思わない。メスカリンとわたしとは、仲良く一致し合うよりもずっと多く、しばしば闘い合った。わたしは揺すぶられ、砕かれた。だが、わたしはいうなりにはならなかった。²⁵

²⁴ Huxley, Aldous, *op. cit.*, pp.10-11.

²⁵ 小海 訳、前掲書、15頁。Michaux, Henri, *op. cit.*, p.620.

ミショーがタイトルに掲げる「奇蹟」は、劇的な意識の変容という意味ではハクスレーと同じであるが、それは〈わたし=自己〉の解体という「ミゼラブル *misérable*」なものであったということである。つまりこのタイトルは、『知覚の扉』に対する批判的なメッセージでもあった。

ここには、初期詩編「エーテル」との、明らかな違いがある。この詩においてエーテルは、人が生きていく上で身につけざるを得ないあらゆる〈ストレス=力〉を解除し、〈弱さ〉という、存在のもっともナイーブな極点へ誘う、という、自分にとって親和的なものだった。今やメスカリンは「いうなりにならず」、「闘い合う」相手となった。

ではメスカリンとの闘いはどのようなものだったのか。

わたしはこの顕微鏡を見ながら放心していた。そして放心していることに疲れていた。その中に見える超自然的なものは何なのか？わたしはほんの僅かだけしか人間を離れていなかった。わたしはむしろ、自分が脳髓の仕事場の中にとらえられ、そこに閉じこめられているように感じていた。²⁶

「脳髓の仕事場」とはもちろん、メスカリン実験の「実験場」という意味である。彼は被験者であると同時に、対象を冷静に観察する科学者であり、「闘い」はすべて、彼の脳の中で遂行されているのである。このような闘いの中から彼が導き出した重要な結論は、メスカリンが狂気（精神分裂症）を出現させるのは、人の意識を *interrupt*（中断・割込み）することによってだ、という点であった。*interrupt*は、人と彼の周りの環境にメスカリンが介入して、彼が日常的に取り結んでいる関係を破壊する事を意味する。このような関係の破壊から、一般的に知られている精神分裂病特有のさまざまな幻覚や幻聴、〈させられ感〉などが生まれてくるのである。このようにして

²⁶ Ibid. p.621

ミショーは、自分のメスカリン体験を分裂症の解説と結びつけて、その検討・考察に入っていく。

さらに注目すべきは、ミショーはこのメスカリンのダメージからの回復を探っていることである。彼にとって回復の過程（帰り道）を模索することは大事なことであった。彼は、三つの方法を述べている。

一つは、自分の中に内的に備わっている生のリズムの発見である。²⁷ あるときミショーは、メスカリンからの攻撃によって完全に酩酊し、ベッドから転げ落ちてなお横たわったままになってしまったことがある。そのとき彼は、ベッドのそばの板張りの上を僅かに動く手で叩くことによって、内的リズムを取り戻し、ようやく自分を取り戻すという経験をした。

二つめは、「山へ行くこと」である。²⁸ 山は、「くすぐるような快感や妥協や無気力や感傷を拒否する」、山は「一種の根源的な勇気を起こさせる」。山によって人は、「ふたたび自分自身のすぐれた水先案内人に戻るように促される」。

三つめは、「自分自身の精神の速度の主人としてとどまること」である。²⁹ そのために、速度を守るための「監視人」が人間の内部に必要なと言う。すなわち、「考える人間の下に、それよりずっと深いところに、コントロールする人間、自分をコントロールする人間が必要なのである」。これは、ハクスレーが否定的なものとして描いた「減量バルブ」の価値を見出すことに他ならない。このようにしてミショーは、ハクスレーとは対蹠的な場所へと踏み出していくのである。

ところで、ミショーのこの三つの方法を貫くものは何か。それは、誕生と死とで区切られる有限な個としての生（ビオス）を持つ存在としての自己から脱して、無限の連続性を持つ根源的な生（ゾーエー）へと通底すること、である。³⁰ <内的リズム>とは自分の生が本来持っているものであり、<山

²⁷ 小海 訳、前掲書、216頁。Michaux, Henri, op. cit., p.760.

²⁸ 同書、218頁。Michaux, Henri, Ibid., p.761.

²⁹ 同書、223頁。Michaux, Henri, Ibid., p.763.

³⁰ 動物・植物を含めて生あるすべてのものを貫く根源的な生命のことを古代ギリシア人はゾーエー(ζωη)と呼び、個別に単独に生きられる生であるビオス(Biog)と区別

>とは自分が社会化される前の、自己を包み育てた環境のことであり、<速度>とは自分の中にある時間感覚のことである。ビオスとしての自己がメスカリンによって解体されたとき、虚無の嵐の中で自分がわずかに抛り所のできるものは、ビオスを無意識下で支えてきたゾーエーとしての生なのである。この観点からミショーは、興味深い二種類のヴィジョンを提出している。ひとつは、『みじめな奇跡』の冒頭に書かれたいくつかのヴィジョン、すなわち、メスカリン服用直後におこる「忽ちのうちに消え去る無数の安っぽいガラス玉」³¹のようなヴィジョンである。もうひとつは、「特権的イメージ *L'image privilégiée.*」と名づけられた、〈原初的な空間〉のことである。その空間とは、要約すると次のようになる。

黒を背景に、輝く海岸が現われる。海岸には無数の線が現われる。それらの線は、表面を表すようになる。やがてそれらは循環を永遠に繰り返すようになり、規則正しい旋回のシステムが作りだされる。旋回システムはいくつも生まれ複雑さを増していくが、混乱はしない。かすかな色彩をもつ輝きが、相互のシステムを区別するからである。これらは、メスカリン陶酔が弱まるにつれ次第にあいまいになり、消えてゆく。³²

「線」や「皺」、「鬚」、「畝」などは、ミショーの幻覚のなかに随所に登場する根源的なものである。それは、自己の存在を意味すると同時に、世界のあり方をも意味する。体験記の中の前期の三冊はミショーの手になるデッサンも挿入されているが、そこにも無数の線や皺や畝が描かれている。ミショーの判断によれば、この特権的イメージは、他のさまざまなヴィジョン

した。したがってビオスは、誕生と死によって区切られるが、ゾーエーは無限の連続性をもったビオスの根源であるような生のことである。

Kerényi, Karl: *Dionysos, Urbild des unzerstörbaren Lebens*, München: Langen Müller, 1976.

カール・ケレーニ『ディオニューロス 破壊されざる生の根源像』(岡田素之訳、白水社1993年)

³¹ 「みじめな奇跡」、小海 訳、前掲書、221頁。Michaux, Henri, op. cit., p.764.

³² 同書、221頁。Ibid., p.764.

の根源にあるものであり、〈リズムの視覚化〉とみなされる。これこそ、様々な幻覚を体験する中からミショーがすくい取ってきた、根源的な生（ゾーエー）の原イメージだと思われる。ここに来てミショーは、かつて『エーテル』で否定したストレスとしての〈力〉とは別の、ゾーエーからくる生命力としての根源的な〈力〉を、〈弱さ〉の替わりに呼び出そうとする。この意味で、『エーテル』からの転換が起こるのである。

『みじめな奇蹟』は、メスカリンによるヴィジョンの出現や、狂気との出会い、その解説、回復の模索などの叙述を通して、それなりの完結性を持って完了する。だがミショーにとっては、ここではまだ、ハクスレー的なメスカリン実験と訣別して独自の問題領域を設定しただけで、問題はこれからである。翌年、ミショー独自のさらなる体験考察が『荒れ騒ぐ無限』L'infini turbulent というタイトルで提示されることになる。

5. 加速する〈無限〉

〈無限〉は、ミショーのメスカリン実験全体の基調となる心的世界を表す鍵概念のひとつである。彼はこの〈無限〉という感覚、あるいは心の状態、どのようなものとして捉えていたのだろうか。ミショーは次のように言う。

われわれは、自分がかつていた最初の状態、そこに自分の身体を支えていた最初の快適な状態の紡い綱を解き、無限を城郭の外へととどめていた自分のすぐれた局在性を失わなければならなかった。³³

無限の圧力は相変わらず続く、我々の中で、われわれを貫いて、静的世界の諸文明の測量師たる無限をではなく——静的世界に一度受け入れられ、安定した無限は、新たな超出に耐えようとはせず、新たな常軌逸脱からは保護されている——常に充電され、膨脹し、超え出ようとする無限を、理解力によって終結と限界と閉鎖とを設けようとする人間の意図

³³ 「荒れ騒ぐ無限」、小海 訳、前掲書、235 頁。Michaux: Ibid. II., p. 808.

と観念とを不断に打ち壊してゆく渦の無限を、あらゆる方向に無限化しながら。³⁴

ここでいう〈無限〉とは、時間・空間的に「限りない」という意味の無限ではない。〈無限〉とは、メスカリンによって解体された自己が、〈いま・ここ〉という〈時間・空間〉に対する根拠を失ったことによって招来された感覚のことである。〈時間・空間〉は人間が、世界や宇宙を受け入れるために人為的に必要とした仮の基準に過ぎない。メスカリンは、人間における〈時間・空間〉は仮そめのものに過ぎないことを、あからさまに突きつけてくるのである。この時に人に訪れるのが、〈無限〉の感覚である。よってこの感覚は、メスカリン体験の基調となる。ミショーはこの感覚を最後まで、執拗にたどっていく。

また、この『荒れ騒ぐ無限』で新たに登場する注目すべき叙述の一つは、先に述べた「特権的イメージ」の延長として出てくる超越的なものの出現である。たとえば彼は、「何千体もの神々」を見ることになる。そして、もうひとつ注目すべきは、エロスのなものが浮上してくることである。エロスとは、生命力の根源であると同時に、他者や共生を受け入れる磁場でもある。ミショーの中で、メスカリン体験の劇的なものが、複雑なままに少しずつ解きほぐされて開かれていきつつあることがわかる。

ミショーの〈わたし〉の探求はメスカリンによってアブノーマルな状況を作り出し、ノーマルなことの正体を暴き出すことであった。現実世界での日常の中で知覚された一切のものは、秩序づけられ、意味づけされ、陳腐なものとなってしまうのであるが、その偽りのヴェールを取り去るためにアブノーマルな状態を作り出す必要があったのである。メスカリンによって作り出されるアブノーマルな状態とは、意識の停滞や麻痺ではなく、「意識の加速状態」であった。〈わたし〉は加速された意識をコントロールすることはできなかった。目に入るものは〈わたし〉のまなざしではなく、向こうからまなざ

³⁴ 同書、242頁。Ibid., p.813.

されるものであり、時間さえも〈わたし〉に一方向的に猛スピードで届くものであり、遠ざかるものでありそのほんの一部しか捉えることができないほど加速されていた。そして〈わたし〉の前には、加速する〈無限〉があった。加速された〈無限〉は荒れ騒ぎ、ノーマルな世界で隠されていた無意識の深淵が突然むき出しになった。この無意識の深淵はどこにでも偏在していて意識に現れているのはほんの「1メートルのうち1センチ」³⁵ であるということが分かった。ノーマルに思考することは極端な微視的現象でしかなかったのである。そこでは〈わたし〉が〈わたし〉であることの根拠であるはずの〈いま・ここ〉の意味が打ち砕かれ、時間と空間、外の世界と内面の境界が曖昧になった。このようにしてメスカリンの作り出したアブノーマルな状態の中で〈わたし〉の存在根拠が虚ろなものになってしまったのである。私たちがノーマルなことと思っている事柄の一切は絶対的なものではなく、むしろ実存の確証が危ういものであり、ひとたび隠されていた無意識の深淵が意識に現れると、いままで自明のことと思われた言葉や意味、世界や自己までが解体していくのである。ミショーの〈わたし〉の探求は、自己の解体過程のさまざまな段階の「無数の小さな事ども *les innombrables petites*」の記録であった。その徹底した内面的な凝視は、混沌、無秩序、無限に対してただひたすらまなざしを向け続けたものであった。このようにして行われたミショーの〈わたし〉の探求の〈旅〉はいったいどこへ行き着いたのであろうか。

6. 「四つの世界」

ミショーが最後に行き着いた世界が、『精神の大いなる試練』の末尾に提示された「四つの世界」である。彼はこの記述の冒頭において、麻薬は人を精神錯乱に追い込むが、その「狂わせる同じ解体力が、それを攻撃するすべを知る者にとっては、まさに超越のジャンプ台になる」³⁶ と述べている。ここで言われていることは、「ノーマル」な世界へと帰還しようとするこ

³⁵ 『精神の大試練』（渡辺広士 訳、審美社 1976 年）、16 頁。Michaux: Ibid. III, p. 314

³⁶ 同書、209 頁。Michaux: Ibid. III, p. 416

て麻薬による自己解体から抜け出そうとすることではなく、³⁷ 解体へと向かう力をそのまま超越に向かう力へ転化しようとする試みのことである。これは本稿の冒頭で述べた、麻薬が不要となる境地へと麻薬常用者を導く、いわゆる〈底つき〉のことを言っていると考えられる。そしてこの〈底つき〉は、四つの世界を拓く。

[引用者：麻薬との闘いの中で生まれた]これまでの小さい流れの数々はもはや一つとしてなく、それらは一つに含みあって、単一のダイナミックな連続になる。まなごしを背後へ向けることを許さない滔々たる流れに、君を運び去る動きやまぬ一つの世界になる。四つの世界が（自然の世界と錯乱した世界の外に）存在する。一どきに現れるのはたった一つである。これらの世界はノーマルな世界をはっきりと排除し、またそれら同士でたがいに排除し合う。³⁸

ここで重要なことは、〈底つき〉の後に拓かれる世界は、「ノーマルな世界」を排除していること、これらの四つの世界が「連続している」こと、そして四つの世界がそれぞれ独立していて閉じられていること、である。特に、「たがいに独立している」ということは、連続していながら相互に連絡し合う通路がない、ということの意味する。だから、ひとつの世界からもうひとつの世界へと移行するためには、なだらかな変化ではなく飛躍が必要となる。それは、飛ぶ前の世界での力が自分の中に十分にみなぎることと同時に、そこから飛ぼうという明確な意思があることによって初めて可能となる。

第一の世界は、「エロチックな世界」である。それは多くの者にとって本能的に見出されうる世界であるが、ミショーにおいてはトランス（失神状態）、またはエクスタシー（入神状態）のときにしか価値がないとされる。エロチシズムについては既に、『精神の大試練』の一年前の1965年に書かれ、『荒

³⁷ 「ノーマルな状態に戻ることは、絶対に不可能で、少しでも部分的にも実現するはずがない」とミショーは述べる。同書、211頁。Michaux: *Ibid.* III, p.417.

³⁸ 同上。

れ騒ぐ無限』の増補版が刊行されたときに収録された「幻覚剤におけるエロスの問題 *Le Problème D'éros*」で述べられている。そこにはエクスタシー (*l'extase*) とともに四つの世界についても触れられている。それによると、エクスタシーとは「魂の中での奇跡的と見えるほどの例外的な統一感であり、… (中略) 全てが同じ方向へと行く。… (中略) 想像もつかない統一感、ひとりで進む、自律的な、停止することのあり得ない、驚くべき凝縮」³⁹ である。そしてこの記述のすぐあとに、残るあと三つの世界も既に提示されている。

エクスタシーは、情熱と拡張感が巨大なものになり、限界あるものが無限なものに、個人的なものが非個人的なものになり、それらがより大きな方向の一つに進み、そのより大きな方向の一つの中に大きな人間的な高揚感が現れ、かくしてそれが、献身を伴う愛の情熱か、あるいは、自己保身とあらゆる慎重さを忘れ去った大胆な英雄的情熱か、あるいはまた遂に (エゴを取り除かれ、おのれが空になることによって *par vacuité, purgé de l'ego*) 全き理解と天啓とを目指す情熱か、になるという条件の下でしか、可能ではないだろう。⁴⁰

すなわち、メスカリンによる自己解体と闘いながらそれを突き抜けた、個体を超えた統一感や調和がエクスタシーであり、それは一つの方向性を持っているというのである。この〈方向性を持つ〉ということがなければ、人はエロチックな快感のレベルに留まってしまうのである。闘い続ける情熱に対する恩寵のように、あるいは偶然の力が働いたかのように、そこからの飛躍が可能になる。

そして、第二の世界である「ヒロイックな世界」が拓かれる。「エロチックな世界」から飛躍して到達したこの地点にはもうエロチックなものは存在しない。それは、「生のエネルギー＝心気」が満ちている世界だが、攻撃性はな

³⁹ 「荒れ騒ぐ無限」小海 訳、前掲書、424頁。Michaux: *Ibid.* II., p.938

⁴⁰ 同上

く、憎悪や復讐や違反や邪悪は存在せず、「森の中の火のように闘いの中にいて、貪り、それでも飽くことを知らず、ありのままに振る舞う」⁴¹ ののである。ミショーによればこの第一と第二の世界は現実との接点を持っており、具体的には第一は脊髄に、第二は脊髄の上の部位にその足場を持っているという。しかし第三以降は、はるかに現実を超えた世界である。

第三の世界は、「至高の愛の世界」⁴² である。ここには、ほとんど宗教的な感情が示されている。愛は、「内的な神に向かうこと」であり、「身を任せるすべを知ること」であり、「滅殺されたものなしの無限」のことである。ここでは、呼びかけとしての「祈り」が同時に答えであるような世界であり、「無限」に接近することが言い難い喜びとなる。

第四の世界は、「高められた黙想の世界」である。確信などを必要とせず、拡大された意識の中で単一性が実現する。ここでは、精神の諸構造の無意味さが明らかになる。二重性も二元論も終りを告げる。認識活動は、主体と客体を区別し、それらを分類し範囲を定め決定しようとするが、このような認識活動を超えて、空に行き着く。「今や、人は向こう側にいる。」そこには、「冒涇を知らず、有用性を知らない叡智」⁴³ がある。ここにおいてミショーは、東洋的な悟達に近い宗教的な確信を述べている。

以上のように、ミショーの提示する「四つの世界」を概観してきたのであるが、彼が述べる言葉がある程度たどることは出来ても、それが何かを指摘するのは難しい。ミショー自身が、このような世界を体験したわけではない。「そこに自分の場を見出したと思い込んだ者がそこにたどり着いたためしはない」⁴⁴ のである。ただミショーが、ノーマルの方へ帰還するのではなく、メスカリンを通じた意識の変容をすべて受け入れた上で、自己と世界を受け入れて、ある精神的な高みへ到達しようとしていることは推察できる。〈底つき〉を経験した麻薬依存者が、その〈底つき〉を人に伝えようとするとき、様々な比喩的表現でしか表現できないし、結局は伝えられないことと同様で

⁴¹ 『精神の大試練』渡辺 訳、前掲書、218 頁。Michaux: Ibid.III, p.422.

⁴² 同書、218 頁。Michaux: Ibid.III, p.422.

⁴³ 同書、224 頁。Michaux: Ibid.III, p.426.

⁴⁴ 同書、221 頁。Michaux: Ibid.III, p.424.

ある。少なくとも十年もの長いあいだメスカリンとともに歩んだミシヨーは、依存的にメスカリンやその他の麻薬を常用していたと思われる。そしてもしそうならば、「四つの世界」として表現された〈底つき〉を経験することなしに、心配した家族や友人の助言を聞き入れただけで、麻薬を遠ざけることは出来なかったであろう。

おわりに

ミシヨーは『精神の大いなる試練』の刊行以降、絵画制作に専念して、詩から離れたばかりでなく著作活動からも遠ざかることになるのだが、例外的な著作の一つとして1969年に *Façons D'endormi Façons D'éveillé* 『夢の見方・眼覚め方』⁴⁵ を刊行する。この本には、彼がメスカリン体験を通過することによって新たに獲得した自由がどれほどのものであったかを、よく示している。この本の原題は〈眠りの諸流儀・眼覚めの諸流儀〉であるが、その内容は、夜寝てからみる夢と昼覚めたままに見る夢の対比と、例示・分析・考察である。

メスカリンによってミシヨーは、想像もできないほどの意識の拡がりと深さを体験として獲得してきた。やがてメスカリンと訣別したミシヨーがふたたび向き合うことになったのは、かつてとは比較にならない豊穡さと謎をもった日常である、「夢」と「夢想」であった。そこでは、かつて彼が書いた初期詩編のような、流血や殺人や逃亡や変身などの極端なことは何も起こらない。もはや彼はそういうものを必要としなくなったのである。ここでは、彼が日常的に体験する夢や夢想の微細な分析と検討がなされている。彼にとっては、もうどんな夢も夢想も彼を驚かしたり熱中させたりすることはない。彼は今やひとつの空（くう）となって、自らの内部から生まれてくる夢や夢想を慈しみ観察し続ける、自由な存在となっているのである。

ミシヨーのメスカリンの記録は、麻薬とあらがいつつも麻薬依存者となっていたひとりの芸術家の、〈底つき〉を経由して〈自由〉を獲得する、苦闘

⁴⁵ 「夢の見方・眼覚め方」小海 訳、前掲書 2 巻 327-400 頁。Michaux: *Ibid.* III, pp.445-537.

のドキュメントとして受けとめることができる。陶酔による麻薬依存者の〈自己探求〉と、その果てにある〈感つき〉、そこからの〈生への反転〉としての依存からの〈真の〉回復、という事態の内実は、これまで正面から考察の対象となることがなかった。したがって、これらの過程が言語化され、表現を獲得することもなかった。ミショーはこの困難な課題に果敢に挑戦し、その成果を我々に提示したのであった。彼は五冊の体験記録の最後の本の最終章に、完全な自己放棄の果に宗教的とも言える〈無限〉体験が、観念的ではなくリアルな心的体験として訪れる境地を語った。そして麻薬と訣別したあとに再び見出した日常は、外なる世界でも内なる世界でもない新たなる世界であった。それはまた、「狂気」のなかに閉じ込められた〈わたし〉から、さらには「荒れ騒ぐ無限」に翻弄される〈わたし〉から、自由な存在としての〈わたし〉へと生まれ変わることができることを身をもって示すことでもあった。このことによって、回復が非常に困難とされている麻薬依存者が死の淵から〈生への反転〉を果たし、新たな自由を獲得する一縷の望みを提示したのであった。